【須永とドイツ】

須永と言えば韓国・朝鮮ですが、意外なことにドイツにも関心を持っていました。

藤沼博「須永元と『須永文庫』」(『史談　会報　第１号』安蘇史談会、１９８５）は、晩年の須永を知る故老の「ドイツへもいった」という証言を載せています。

昭和１７年（１９４２）に亡くなった須永の晩年であれば、ドイツはヒトラーが政権を執っていた頃だと思われます。ところが、『須永日記』や須永自身の漢詩からは須永がドイツに行ったことをうかがわせる資料は見つかっていません。

一方、大川圭吾「須永元を通して出会った人たち」(『史談　第３２号』安蘇史談会、２０１６）は、須永について「明治二二年三月二二日に慶應義塾別科独仏科に入学し、その後大学部を卒業する」と書いています。

また、須永文庫にはドイツ語の文献があります。ただ、郷土博物館ではなく佐野市立図書館に置かれています。このほど同図書館から閲覧の機会を与えられたので報告します。

閲覧したのは以下の４件です。

１．Brockhaus' Konversations=Lexikon

２．Handwörterbuch der Staatswissenschaften

３．Das Echo

４．Ost＝Asien

１．は１９０１～１９０４年刊行のブロックハウスという出版社の百科事典です。全１７巻ですが、須永文庫には第１５巻が欠けています。

２．は国家学の事典です。須永文庫にあるのは１８９８～１９０１年刊行の第２版で、全７巻です。西川正雄編『ドイツ史研究入門』（東京大学出版会、１９８４）は『国家学事典』としています。

３．は週刊誌で、ZEITSCHRIFTEN DATENBANK というドイツ語雑誌のデータベースによると１８８２年から１９３５年まで刊行されました。須永文庫にあるのは１９０２～１９０６年刊行のものを８冊に合冊したものです。

４．は玉井喜作という今の山口県光市出身のジャーナリストがベルリンで刊行した月刊誌です。商工業、政治、科学、美術などを扱い、日本でも発売しました。須永文庫には１８９８～１９０５年のものを７冊に合冊したものがあります。

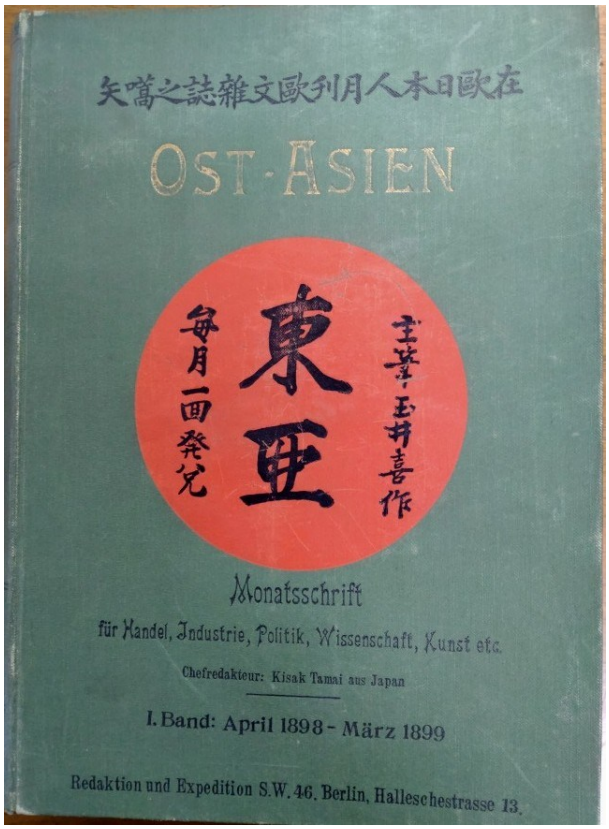
【明治時代の国際ジャーナリスト】

Ost＝Asien はほとんどドイツ語で書かれていますが、明治３１年（１８９８）４月に発刊された第１号に載る「本誌発行ノ趣旨」は日本語で書かれ、毎号の広告には日本語もあります。

誌名について「本誌発行ノ趣旨」は「名ケテ東亜ト称シ」としています。また、「明治三十一年三月　発行兼出版人　主筆兼責任記者　玉井喜作述」とも記されています。

この「本誌発行ノ趣旨」と見開きの左側のページにドイツ語の「序文」が載り、「Kisak　Tamai」と名前を入れています。

須永文庫にあるものは一年分を合本して表紙をつけていますが、この表紙には漢字で「在欧日本人月刊欧文雑誌之嚆矢」「主筆　玉井喜作」「東亜」「毎月一回発兌」と記されています。



中扉にも「在欧日本人月刊欧文雑誌ノ始稿」「日独貿易ノ大機関」「毎号印刷高五千部以上」「主筆　玉井喜作」「東亜」「毎月一回発兌」「毎号紙数四十八頁以上」「東京大販売南江堂」とあります。

今の日本で玉井の知名度はあまり高くありませんが、評伝が出ています。

湯郷将和『キサク・タマイの冒険』（新人物往来社、１９８９）、大島幹雄『シベリア漂流―玉井喜作の生涯―』（新潮社、１９９８）で、参考になります。

第１号の目次の一部を紹介します。

序文

新しい日本の内閣

フィリピンと日本

ドイツ帝国と日本との間の商業・海運契約

日本の外国貿易

日本の銀行

ドイツの対中日貿易

日本での宣教報告

森村兄弟

美貌の歌い手 Rokwa

雑報

広告

【朝鮮の小説】

「美貌の歌い手 Rokwa」は、玉井がドイツ語に翻訳した朝鮮の短編小説です。

精査していないので内容の紹介は出来ませんが、玉井がなぜ朝鮮の小説に関心を寄せたのか、興味を惹かれるところです。

雑報には大院君ら国王の両親の死などが報じられています。

また、明治３３年（１９００）１０月の第３１号には Die Lage in Korea--Prinz Boku-Yeiko と題する記事が載り、日本に亡命していた朴泳孝が朝鮮情勢を語っ

ています。

須永がこれらドイツ語の文献を実際に読んだのか分かりませんが、保存状態から推測すると、何度も繰り返し読んだ感じはしませんでした。

須永が本当にドイツへ行ったのか、結局よく分かりませんが、今後、須永とドイツとの関りを示す資料の発見に期待しています。

2025 年 3 月 2 日　広沢有久

須永文庫資料研究室のアドレスは https://sano-haku.com/sunaga-bunko/